



第38回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会秋季大会

学術セミナー8
(ランチョンセミナー)

外耳・中耳感染症における 局所治療の重要性とpitfall

司会

琉球大学病院
耳鼻咽喉科 教授

鈴木 幹男 先生

演者

慶應義塾大学病院
聴覚センター センター長

大石 直樹 先生

日時

2024年
12/1 日
12:05-12:55

場所

第2会場
国立京都国際会館 1F
Annex Hall 2

外耳・中耳感染症における 局所治療の重要性とpitfall

慶應義塾大学病院
聴覚センター センター長

大石 直樹 先生

感染症への対処法の基本として、原因菌に対して有効な薬剤を選択し投与すること、病変部位に有効濃度の薬剤が到達すること、そして原因菌を物理的に減らすこと、などが挙げられる。そのため、感染症に対して抗菌薬などの薬剤を全身投与のみで治療することは時として不十分な治療となり得るが、外耳・中耳の感染症は特に局所治療の重要性が高い領域である。顕微鏡下に存在する滲出液を丁寧に吸引除去することは、局所の菌量を減らし、局所投与する薬剤が病変に確実に届くようになるために重要な手技である。その上で、投与する薬剤を選択するが、本邦において30年以上ぶりに承認された点耳抗菌薬であるフルオロキノロン系抗菌耳科用製剤「コムレクス®」は、重要な選択肢となる。

コムレクス®は、従来の点耳薬剤に比べて高濃度の製品であることが特長の一つで、高い有効性を期待できるとともに、薬剤耐性化を阻止できることが期待される。そして、外耳中耳に投与する薬剤はときに耳毒性が問題となるが、多施設共同、無作為化二重盲検による国内第Ⅲ相臨床試験においてコムレクス®とプラセボと同等の副作用発現率であり、安全性の高い薬剤であることが示された。

本セミナーでは、外耳・中耳への局所投与を行う薬剤として、抗菌薬としてのコムレクス®や広い抗菌活性を有するブロー氏液が有効であった症例を紹介するとともに、歴史的に知られている耳毒性を有する薬剤を改めて紹介、耳毒性に関して広く注意喚起を行いたい。そして、基本的な耳処置のコツとpitfall などについても紹介したい。